

史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会
編

伊勢街道ものがたり（明和町

竹川（新茶屋）

明和町

ごあいさつ

三重県多気郡明和町 町長 中井 幸充

本書をまとめられた史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会では、これまで伊勢街道を紹介するマップの作成や伊勢街道のカラーブック化、伊勢街道ウォークなどの事業を会員の方々のご努力によつて行つてこられ、町の活性化にご尽力いただいております。

明和町では、現在も伊勢街道沿いに多くの住宅が並び、それぞれの家にはかつて伊勢神宮への参宮者をもてなした品々や多くの逸話が残されていますが、これまでまとまつた解説書がなかつたため、これらを充分に活かしきれていませんでした。しかし、これらの貴重な資源を地元に密着した目線で丁寧に拾い集め、かつての懐わいを今に伝えようと会員の方々が奮起していただいたおかげで、本書「伊勢街道ものがたり」が完成しました。

こうした地域での活動によって、町の歴史や文化財が活用され、次世代へと受け継がれていくことは大変喜ばしく、改めて会員の皆様や関係者の方々に対しても厚くお礼申し上げます。

はじめに

史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会会長 永島 畿

平成二十七年七月三十一日

明和町には、全国唯一の史跡斎宮跡をはじめ、伊勢街道の町並み、日本の湿地五〇〇選に選定された祓川など、魅力ある歴史遺産・自然遺産が多数あります。しかし、これらを地域住民の資産として十分に活かしきれておらず、世の中の国際化や個人主義的価値観の拡大に伴い、地域社会の崩壊、地域文化の没個性化が危惧されつつあります。そのため、こうした資源を活かしたまちづくりを住民・行政が協働で実践することにより、地域独自の魅力や文化力を高め、活力ある地域を取り戻すことが求められています。私たち史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会（以降、まちづくり会）は、こうした時代背景を鑑み、平成十八年度に立ち上げた「明日の斎宮を考える会」のメンバーを母体として、平成十九年十一月に、史跡斎宮跡・伊勢街道を核としたまちづくりについて住民・行政が定期的に語り合える場として本会を発足させました。以後、まちづくり会は月一回のベースで開催しており、七年を迎えた平成二十六年十一月には通算七十回目となりました。

これまでに三十七項目におよぶ「まちづくりプログラム推進計画」をベースとして、手始めに街道

治いの魅力発見調査を行いました。その成果は、「伊勢街道散策マップ」次いで「伊勢街道屋号マップ」としてまとめることができ、ウォーカー愛好家等に役立っていると聞きます。一方、斎王をテーマとする紙芝居作成部会では、年間一作品のベースで構成・脚本・貼り絵・演出に至るまで手作りによる作品を制作し、自らを「かわせみ座」と称し、M祭ほか、斎宮浪漫まつり、いつきのみや梅まつり、学校訪問等で幅広い公演活動を実施しています。またこうした活動にあわせて、伊勢街道（県道竹川牛葉間）のカラー舗装化と側溝整備も行われました。

平成二十四年度からは、伊勢街道にまつわる遺産やエピソードについて、地元の方々に知っていたらしくとともに、街道を案内する際のテキストとしても使える冊子を作ろうということになり、現地調査、文献調査、聞き取り調査等を実施し、地区ごとに執筆を分担して皆で内容を検討してきました。そしてようやくここに「伊勢街道ものがたり」を刊行する運びとなりました。本刊が地域の魅力発信の一助となることを願ってやみません。

最後に、自分たちでできること、やりたいことからまずやってみようと始まった会ですが、その取組は決してスピードイーではありません。しかし、着実にその成果が見えてきたことで、活動への意欲や自信が沸いています。今後もこの会は継続していくないと考えていますので、様々な分野の皆様方のなお一層のご支援ならびにご協力をお願い申し上げます。

目次

三十二	六地蔵石幢
三十三	下郷の庄屋、須賀家・加藤家
三十四	明星茶屋
三十五	安養寺
三十六	明星水
三十七	仲神社
三十八	そうめん坂
三十九	転輪寺
四十	オンバサン
四十一	史跡水池土器製作遺跡
四十二	街道沿いの営み(下有爾界隈)
四十三	新茶屋の沿革
四十四	秋田屋事件
四十五	三忠の擬草紙
四十六	田丸城の門
四十七	八柱神社
四十八	新茶屋の弘法さん

本書の内容にあたっては左記の文献を参考にし、一部内容の引用も行つた。

一九三五【瘠官村鄉土誌】瘠官商工会發行

明和町史編集委員会 一九七二「明和町史」明和町役場発行

野村 可通 一九七六「伊勢の古市あれこれ 道歌の巻」

三重県郷土資料刊行会

明和町郷土文化を守る会 100 「里の史蹟散歩」 明和町

鄉士文伯德等石公
明和興教育委員會獨行

明治時史編纂委員會
一九〇〇四明治時史
史料編 第一卷

目次

伊勢街道の概要

伊勢街道は、四日市の日永の追分で東海道から分岐し、伊勢湾岸沿いに南下して、白子、津、松阪、斎宮を経て伊勢に至るおよそ十八里（約七十キロメートル）の道で参宮街道とも呼ばれていました。このルートでは、近世をむかえ伊勢参宮が活発になると、参宮客へのサービスを提供し、もてなすために、街道沿いに集落が発達し、物資や文化、情報が行き交い大いに賑わいました。

明和町内では、天正十六年（一五八八）、蒲生氏郷の松坂入城とともに、伊勢街道が南に付け替えられたことにより、字古里（現坂本集落の南）の人達が、街道筋に移り、参宮客相手の商いをするようになり、茶店、旅籠、土産物屋等が営まれるようになりました。すなわち、松坂側から順に、竹川、金剛坂、牛葉、中町、勝見、上野、下有爾、新茶屋といった集落が並びます。

現在の道幅は約六メートルで、昭和三十四年（一九五九年）に国道から県道となりました。



道標（従是外宮三里）

一 竹川（祓川）・竹川の橋



祓川橋（昭和 7 年 2 月）



昭和 39 年頃の神宮橋

竹川（祓川）は、古代「多氣川」「竹河」「近河」「金河」とも呼ばれました。斎王及び勅使斎官等が両大神宮に参向される際にまず竹川で禊をされるのが例であったので、「祓川」とも呼ばれたのです。今は櫛田川の支流で川幅も狭いですが、古代はこの川が本流で、宇川原一帯が川の中州であつたらしく、元の櫛田川はほんの小さな溝川だったと伝えられています。それが、永保二年（一〇八二）七月の大洪水で堤防が決壊して新たに今の櫛田川が形成され、祓川の方は急に水勢が細くなつたといわれています。

竹川の橋は、今の祓川橋の位置ではなく、それより北方の宇祓戸のあたりに架かっていたそうです。昔、竹川の向川原に通じる小道に架かっていた「神宮橋」があつた場所ではなかろうかとも推定されています。

二 祇川の渡し

天正十六年（一五八八）、参宮街道が南に移設され新街道が開通すると、紀州藩は祇川を渡る部分に、冬から春にかけての渴水期には、船の上に仮の板橋をかけ、また夏から秋にかけての増水期には、渡し船により橋賃、船賃を徴収していました。

また、江戸時代の末期、仮橋を架けた祇川では、渡船賃の代わりに橋銭を徴収していました。ちなみにその賃率は、明治十三年（一八八〇）頃には、人は二厘、人力車は六厘、荷車／牛馬は四厘でした。

なお、現在の祇川橋は昭和四十一年に完成したものです。



稻置川（祇川）『伊勢参宮名所図会』

三 花園旧跡

祓川の東、百メートルのところ、近鉄線路の傍らに僅かあまりの小高い草生地があり、樹木の下に花園旧跡の碑があります。これは、大正十五年（一九二六）に花園旧跡保存会が、かつて斎王に関係ある花園の昔を偲び、遺跡を永久に保存するために建てたものです。

『斎宮村郷土誌』によると、

『催馬樂』にある歌『竹川の橋の詰なるや 橋の詰なるや 花園に はれ花園に 我をば放てや
少女たくへて』は有名で、史書に通じた人々のよく知るところである。また、明治三年（一八七〇）に竹川の戸長が度会県に提出した『調書』には、祓川の東にある田の中に森に花園旧跡と伝わるところあり、この地の字名も花園である。現今、花園旧跡保存会なるものが標石を建て、椿、桜の若木を植えてその保存顕彰に努めている。』とあります。

『源氏物語』の『竹河』の巻に、藤侍従と呼ばれる玉鬘の三男が「竹河」という催馬樂を歌う場面があり、「竹河の橋詰めの花園に、私を女の子と一緒に放してほしい」という歌が登場します。これが『源氏物語』の竹河の段の名の由来とされています。「竹河」は祓川のことを指し、その近くに花園があつたことを示唆しています。その名残が花園跡として伝承されてきたものと思われます。

『大神宮史要』には、斎宮の西方には竹川（祓川）が流れていて、その畔に花園があつたことは、催馬楽の歌などによつても知られるから、斎王は御つれづれのままに、時々この地に足を運ばれたこともあつたであろうと記されています。

このほか、『伊勢旧跡志』には、「竹川の小橋の前に花園の名あり、是は、斎の内親王の御心を慰め奉らんとて、四時のか紅葉を集め植えたる跡なり。」とあります。

また、花園のことは、『勢陽雜記』、『倭訓栞』、『伊勢名勝誌』、『三國地誌』などの古文献などにも散見されます。



花園旧跡の碑

四 祇戸跡

旧竹神社跡の標柱の前の小道を少し行き左に折れた三十メートル先に「祇戸跡」の標柱があります。

『斎宮村郷土誌』によると、「斎王が群行し斎宮に入るに当たり、竹川（祇川）で堺川の祓えを行つた。また、斎王は伊勢神宮の三節祭に参向する際、尾野湊（大淀）とこの地で禊祓を行つた。その場所を古くは『祇殿』と称した。この祇殿のことは、『延喜斎宮式』や『伊勢大神宮參詣記』に記されている。今、竹川の西北にある祇川の右岸に祇戸と称する字名が残るが、これは祇殿からなまつて呼ばれるようになったものと思う。古代の街道は、高木（松阪市）から神宮橋のあたりで祇川を渡つて、祇戸、花園を通つて古里に出たとするのが、地理的にも当たつていると思う。』とあります。

しかし、この祇戸の位置について、『勢陽雜記』は、この標柱のある場所として、『斎宮寮廃跡図（神宮神事考證附録）』では、旧竹神社跡のすぐ西にあるとしています。おそらくこの二書は字祇戸の存在に気付かなかつたことが窺えます。

いずれにしても、この祇戸（祇殿）跡の位置については、後学にゆだねざるを得ないかと思われます。なお、現存する字祇戸は、標柱から少し西へ行つた水田を一望できるところから、正面やや左あたりに見える祇川沿いの木立の下です。

五 竹神社跡

斎宮歴史博物館南公園駐車場の南の小道を西に行つた山林の前に標柱があります。

『斎宮村郷土誌』には、「竹神社は俗に『桧木宮』と称した。倭姫命の伊勢巡幸の時、柳田、根棕の二ヶ村を奉つたとされる宇加乃日子とその子吉比古の子孫が代々多気の連と称して多気郡の地を支配した。この竹氏がその氏祖の神を祀つたのが竹神社である。しかし、祭神は『古語拾遺』に云う麻績氏の祖『長白羽神』とされている。これは『内官儀式帳』に大化二年（六四六）麻績氏が多気評督領に任じられるとあり、竹氏と斎しく多気郡を領していたことなのであるが、後世このことを誤り信じ麻績氏の祖を祀つたものである。」とあります。

また、『伊勢式内神社検録』には、「この社は『斎宮式』に云う竹上社である。また、この地を竹田の国と解し祭神を竹田臣の祖大彦命とする説は誤りである。この社が產土神社となつてからは、天王を祭神とする。八王子も祭つていたともするが八王子は、この社の南にある若宮社の祭神である。」とあります。

竹神社の祭神が麻績氏の祖か竹氏の祖かについては、今後の面白い課題の一つです。

なお、この地にあつた竹神社は明治四十四年（一九一）に現在の竹神社に合祀されています。



旧竹神社跡石碑建立式（昭和 16 年）

六 郷土の偉人 森島陳明

森島家初代三右衛門由門の三男清右衛門宗定が、分家（向屋敷）し、それから四代目が嘉平次陳明です。宝暦四年（一七五四）に金剛坂に生まれた陳明は、博学多芸で特に佛學に造詣が深く、各地の知識人たちと研究を重ねてきました。

また印版士高芙蓉に師事して閑竜斎と称して篆刻（木石などの材料に印として文字を彫り付けること）の技を学びました。その優れた篆刻技術によって、かつて有栖川宮家の印璽を篆刻してお褒めにあずかったことがあります。

また楽焼にも興味をもち、その作品はとても風流なもので、獨特の趣きがあつたため、茶人の間に珍重され、「陳明焼」と称しました。万古焼、安東焼、時中焼と並んで伊勢四窯の一つに数えられています。その他書画にも堪能で逸品多く、謡曲もよくしました。

このように陳明は、漢詩、和歌、陶芸、茶道、南宗画、謡曲など、諸芸に通じ活躍した郷土の偉人です。

文政十三年（一八三〇）七十七歳で没しましたが、金剛坂墓地の墓石に、辞世の句が刻まれています。

「日の本に生まれて終る今さらば高天原にくつろぎ申さん」
「月一ツうきよ乃空尔置きミやげ」



「陳明焼 花生」（渡邊幸宏氏所蔵）



森島陳明 墓石

七 芝の増上寺の客員・佛学者、森島十玄斎

森島専吾由文は、江戸に出て芝の増上寺の門を叩き、ここで長年佛学の研鑽に励みました。後年、佛学研鑽の成果の一つとして『華厳探玄記』を著わしました。佛学では「十玄斎」と号し、また儒学では「南陽」を名乗りました。

金剛坂森島家墓地の歴代当主の墓石に並んで、十玄斎の佛学研究書の草稿塚があります。

なお、十玄斎は陳明の叔父に当たる人で、墓石には、「龍口 十玄斎賢首居士」「龍口隱士 舊華墓」と刻まれています。



草稿塚

八 山之庵

山之庵は、金剛坂集落のほぼ中央にあつた曹洞宗のお寺で、創立年代も住職も詳しくは判りません。明治元年（一八六八）に他の寺々と一緒に廃寺となりましたが、寺号も建物も引き続き永らく残つていました。

明治八年（一八七五）から明治十一年（一八七八）までは、『金剛坂学校』の仮教場となつて土堤道場にあつた郷学校以来の生徒を収容しました。また、明治十八年（一八八五）頃から坂本にできた多気郡高等学校に通学する遠隔子弟のために、寄宿舎として開放していました。

明治二十年（一八八七）になつて、寺号は一志郡阿坂村（現在の松阪市阿坂町）へ、建物は北勢某寺へ移転し、その跡地に正木綱太郎氏が医院を建てて開業しました。

九 花園学校

金剛坂集落内の山之庵で開設された『金剛坂学校』は、明治十一年（一八七八）五月、竹川の西部（正木家の庭園春秋園）に校舎を新築し、これに移りました。そして明治十五年（一八八二）八月には大日寺の『上村学校』、大儀庵の『池村学校』を合併して『花園学校』と改称されました。また、明治十八年（一八八五）には校舎が増築され、『坂本学校』をも合併しました。

明治二十年（一八八七）、学制の改正に伴い、花園学校は、尋常資格の小学校となりました。

その後、明治四十一年（一九〇八）四月、斎宮尋常小学校と花園尋常小学校が合併されたことに伴い、元花園学校の敷地は、医師正木鋼太郎が譲り受けて、旧態の築山、庭石等を保存して『春秋園』と称しました。

十 報徳社

金剛坂の報徳社（組）は、明治十九年（一八六六）に櫛谷定治郎（一八五九—一九二五）によつて創設されました。当時、定治郎は二十七歳、しかし既に二十四歳の時から金剛坂戸長を務めていました。その後、明治二十二年（一八八九）、斎宮村村長となり、大正十四年（一九二五）、在職中に亡くなるまで三十八年間村長を務めました。

金剛坂集落は伊勢街道に沿い、農業の傍ら旅客相手の商売をする人達が住み生活を営んでいましたが、ある数年間、戸長にその人を得ず、人心乱れ、倒産する者が続出し、集落の前途が大変心配されました。その時、立ち上がったのが櫛谷定治郎で、当時疲弊した金剛坂を立て直すには、幕末期に活躍した小田原の二宮尊徳（一二八七—一八五六）の教え報徳主義に基づき、区民を説得して報徳社を組織し、まず社員に耕地を所有させて恒心を培うことを計画しました。つまり山林を等分して開墾させ、畑を造り、その所有権は報徳社に保留して、耕耘利潤は永代無償で社員各自に習得させました。

経費については、社員の積立金と冠婚葬祭の儀礼中虚飾に渉るものを節約させて、資産の階級に応じて寄付させたものを充て、人々に勤儉節約と勤労の尊さを実感させ、その後も同様の方法で、明治

十九年（一八八六）から大正四年（一九一三）まで共同開墾を続けました。畑は社員一人当たり二反六畝余歩になりました。また田も買収し、社員に小作させました。

また、社員および家族の病気、怪我、風害などの困難に対し、規定に準じて見舞金、無利子の貸付金、香料を贈り、福利の充実を図っています。

また、大正十二年（一九二三）には、農作業の機械化に向けて石油発動機、精米精麦機、大豆粕粉碎機、麦圧片機、稻穀機、初搗機、製糸機などを共同購入しています。

大正十三年（一九二四）には、農業用牛馬、肥料購入代金の貸与規定を設け、低利で個人に貸付などを行っていました。

報徳社の下、勤労の大切さを説き、生活の安定、福利の充実、農業の振興、集落全体としての繁栄安定に大きな働きをしました。

報徳社の創立者、櫛谷定治郎の表徳の碑は、伊勢街道より金剛坂集落の中を南へ約二百メートル余り入ったところにあります。



表徳の碑

十一 「立場茶屋」竹川の島村家

竹川の「立場茶屋」は、江戸時代に街道を往来する駕籠や荷馬等の休息や交代をした處です。

島村家は、長年この「立場」を管理し、庄屋も勤めました。いつの頃か、九州白杵から伊勢参宮に来た娘が、帰路、竹川辺りで病に倒れていたところを、島村家はその娘を三カ月程も養生させ、快復した娘を道中手形の手配までして見送ったという逸話が残されています。

今もまだ漆の香るような椀や膳、火鉢等が多数残されていて、これらの漆器類の手入れをしていると、当時の「立場」の賑わいが彷彿とされるそうです。



「立場茶屋」島村家



漆器盤（天保 4 年（1833））



漆重箱（寛政 6 年（1794））

十二 御殿 旧家高木家

竹川中町にある御殿と呼ばれた旧家高木の邸宅は、現在、鈴木氏の所有となっています。



御殿 旧家高木家(昭和初期)

高木家は、寛永十五年(一六三八)に没した治郎右衛門が初代で、歴代治郎右衛門を称し、節齊、慎齊、久良人、一道と相続して家名を掲げてきました。また、屋敷地についても、現在所有の北島医院の屋敷地も以前は高木家が所有していたと言われています。また、西側は御糸道まで高木家の屋敷地であったと言われています。久良人は、文化十四年(一八一七)、紀州に生まれ、のち高木家の婿養子となりました。蘭学を長崎で学んで洋医に通じ、紀州候田丸藩の御典医となりました。その関係で、田丸藩主久能丹波守が、時々駕籠で立ち寄られることもあったので、御殿造りの邸宅を構えていました。なお、当地で痘瘡が流行した際、界限で種痘の法を心得ていたのは唯一、久良人だけでした。竹川墓地にある墓石には、「高木久良人墓」、裏面に「明治十三年九月十日没」とあります。一道は、明治十四年(一八八一)、高木家へ入り婿となり、多氣郡役所に勤め首席書記として郡政に手腕を發揮しました。墓石には、正八位勲八等と刻まれ、祀られています。

十三 大森座

明治三十二年（一八九九）の頃から、大字竹川の高木宗次郎が講元となつて講社を組織し、劇場（大森座）を經營して、巡業芸人を招いて次々と芝居や浪曲を開演していました。聞くところによると、この劇場は、伊勢古市の劇場に匹敵するほどの立派なもので、盛況であつたと言います。

劇場は今の北島医院の敷地にあり、一度風害のために倒壊し再興されましたが、鉄道の普及に伴い次第に街道を通過する参宮客が遠のくに従い、明治四十年（一九〇七）頃、解散してしまいました。なお、街道の筋向いにも簡易な回り舞台を備えた「中川座」という芝居小屋があつたそうですが、詳細は不明です。

十四 旧家 田所家（傳與門）

傳與門家は、延宝年間（一六七三・一六八〇）、初代三藏が江戸より当地に来て創立した家柄です。三代目傳與門は、江戸の堀木店に勤め、帰省後、享保四年（一七一九）から菅笠、大豆、干鰯等の商売を開きました。

寛政年間（一七八九・一八〇一）、四代目傳與門の時、藤堂藩主より農業の肥料受給のため、肥料商を命ぜられています。伊勢から菅笠を、北海道から干鰯を買い入れ、代々家運を振興しました。

七代目傳與門は、天保十一年（一八四〇）生まれで、幼名を勝次郎といい、資性、温厚篤実で、新しい蔵や屋敷を建てました。

八代目傳與門は、慶応三年（一八六七）に生まれ、父にもまして商売熱心で、明治三十八年（一九〇六）に肥料の製造を開始しました。また、刻煙草の製造販売も行つたほか、明治四十二年（一九一〇）には伊勢表の問屋業を開業し、大正十四年（一九二五）には、大淀にあつた倉庫を相可口に建て替えました。昭和二年に没しましたが、田所家の中興の祖というべき人でした。

九代目の誠一は、慶應大学理財科を卒業し、勢南銀行に入行。その後、百五銀行と合併になり、重役を務め、退職後は北野の一七八部隊跡に近畿製紙株式会社を設立しました。

田所家屋敷の奥には鎮守の森があり、周囲は静寂で独特な雰囲気が感じられます。また、お稲荷さんも祀られていますが、この稲荷は、以前は字古里にあり、現在の斎宮歴史博物館入口に整備保存されている塚山二号墳の上に祀られていたものです。



旧家 田所家

十五 齋宮郵便局



齋宮郵便局落成記念写真（昭和4年）

明治七年（一八七四）三月、大字斎宮五十五番屋敷に『斎宮郵便役所』が設置され、乾周次郎が郵便取扱役に任せられて郵便集配事務を取り扱うことになり、翌八年一月『斎宮郵便局』と改称されました。明治十七年（一八八四）九月、木戸口久人が郵便取扱役となり、明治二十一年（一八八八）十二月にはその子木戸口久太郎が斎宮郵便局長に任命されています。明治二十八年（一八九五）十二月には、大字竹川五十七番地屋敷（現在の二四八番地）に局舎が移され、島村半七が局長に任せられました。その後、郵便集配事務に加えて、内国電信事務や電話通話事務も取り扱うようになりました。

昭和四年六月には、街道の斜め向筋の竹川二七二番地に局舎が新築移転され、さらに昭和四十三年九月に二軒西側の現在の場所に移転しています。この間、局名は、斎明郵便局、明和郵便局と改称されています。なお、平成五年三月に明和郵便局は北野へ新築移転されましたが、その後も個人経営の明和町竹川簡易郵便局として業務が続けられています。

十六 斎宮村役場



旧斎宮村役場

明治二十二年（一八八九）の町村制実施に伴い、七つの大字を抱合した新斎宮村が誕生し、乾覚郎が初代村長となり、同家の菩提寺である觀音寺の堂宇どううを村役場に貸与して行政事務が開始されました。

明治二十二年十月、櫛谷定治郎が二代目村長を引き継ぎ、再選されて三十八年間も勤続されました。その間、明治三十一年三月、斎宮牛葉組が觀音寺の旧堂宇を上御糸村大字佐田へ売り払い、その跡地に村役場と登記所を新築して貸供しています。

その後、斎宮村役場は、明治四十二年（一九〇九）二月、現斎宮小学校前に移築された花園学校の旧教室で執務が行われ、さらに大正十四年（一九二五）七月、新庁舎が建てられました。

十七 乾家

斎宮寮が廃絶したのち、天正四年（一五七六）に国司北畠の家臣乾覚助源休が、その家来十八名を引き連れ、一志郡の多気の城から落ち延びてきて、斎宮寮跡の南部を開拓し、西堀木郷（現在の牛葉）と称し、この地に永住し庄屋となります。

源休は、寛永四年（一六二七）に没しましたが、その後、明治廢藩に至るまで八代の間、覚左衛門を称し、慶長支判株の庄屋として産業の開発等に尽力しました。乾家は、当初街道の北側（現在の五百銀行あたり）に住居を構えていましたが、江戸時代中期に街道の南側に住居を移し、その西側に店を建て、「たばこ入斎宮いぬい」の看板を掲げて、明治の初めころまで紙煙草入れの製造、販売を行つていました。



乾家（昭和初期）



「たばこ入」看板

十八 永島家（本家）

伊勢の国司、北畠の家臣の四代目、永島丈右衛門錦次（遊賀）が享保年代（一七一六～一七三五）に山田（現、伊勢市）妙見町からこの地に移住し、西堀木郷の庄屋となります。

明和元年（一七六四）、当家に滞在した曾我蕭白は、四十四枚あまりの襖絵を描き、現在、これらは国の重要文化財に指定され、三重県立美術館に保管されています。

明治二年（一八六九）三月十一日、十三日と明治十三年（一八八〇）

七月七日、九日に明治天皇が伊勢神宮に行幸された時、往路、復路とも当家で御小休されています。また、明治二十年（一八八七）三月六日には、英照皇后も御小休されています。

現在、永島家の庭には、その時、明治天皇が使われた蹲踞（菊の御紋付き手洗い）が残されています。



永島家（本家）（昭和初期）



蹲踞

十九 永島 家（分家）

永島丈右衛門錦次（遊賀）の次男、源右衛門敬次は、明和六年（一七六九）、錦次から家財田畠の四分を譲り受け分家し、「和泉屋」と号して酒造業、小間物店、旅籠を始めました。

文久三年（一八六三）には、勅使の柳原光愛、藤波教忠、橋本実染の三人と南画家の谷口露山が五日間程宿泊されており、その時描かれた風景画が、掛け軸として残されています。

なお、源右衛門源作を称して代々、酒造業を続けていましたが、明治二十年（一八八七）頃に廃業しました。



永島（分家）「和泉屋」『伊勢参宮名所図会』より



谷口露山が描いた風景画

二十 曽我蕭白の襖絵

曾我蕭白そがしょくはくが永島家に大量の襖絵を残すことになつたきっかけになる出来事が、桃沢如水ももざわにょすいという人物が明治末に集めた曾我蕭白の逸話集に書かれています。



曾我蕭白作襖絵「竹林七賢図」(三重県立美術館所蔵)



同 「竹林七賢図」(三重県立美術館所蔵)

これによると、明和元年（一七六四）、永島淨顕よしとあきが、外出した帰り道に、金剛坂の下まで来ると、一人の青年が路傍に打ち倒れて、その頭のあたりに頭陀袋ずだぶくろと筆がほり出してあつたので、親切に呼び起こして聞いてみると、俺は画家だが空腹のために、もはや歩行もできなくなつたから寝ているのだという。これを聞いては捨てておくわけにもいかず、親切に家に連れ帰ることとなりました。そのあと、当時新築になつたばかりの同家の襖に彩管を揮うことになつたのです。

二十一 警察署

明治二年（一八六九）、廢藩置縣の後は、斎宮村の和泉屋（永島分家）の東屋敷に羅審屯所（警察署）が設置され、八名の羅審（巡査）が駐在して、参宮道者の取締まり、監視等を行っていました。また、相可、櫛田の両屯所に駐在する各々二名の羅審をも統括して、山田、松阪間の中部警察機関としての重要な役割も担っていました。

ところが明治十二年（一八七九）に相可村が多気郡の中心となり、多気郡役所と共に相可警察署が設置され、五ヶ谷、川添以東の多気郡を管轄するようになつたことにより、明治十三年九月、斎宮村には、街道向かい側の觀音寺敷地内（現、高森歯科医院地）に「斎宮巡查交番所」が設置されました。そして明治十九年（一八八六）一月には、「斎宮巡查派出所」と改称され、明治二十年には、さらに「相可警察署斎宮村巡查駐在所」と改称されています。なお、大正五年（一九一六）には、警察事務の敏活を図るために、本村の有志者の拠出金を以て警察電話が特設されました。

その後、昭和三十四年（一九五九）四月に明和町斎宮駐在所と改称、昭和四十九年（一九七四）一月に竹神社西側へ移転、平成十七年（二〇〇五）四月には現在の明和町役場東に移転し、名称も松阪警察署明和交番と改称され、現在に至っています。

二十二 観音寺

天正四年（一五七六）、西堀木郷（牛葉）を草分けして土着した乾源休が、その菩提寺として、斎宮

にしほりきう

寮跡の西南郊外、最勝寺に創建したのが観音寺です。

源休から六代目覺左衛門守義の代になって、寛政七年（一七九五）、乾家の屋敷の東北（現、牛葉公民館の地）に移転され、一層立派な寺となりました。

明治元年（一八六八）に廃寺となり、本堂は佐田の清光寺に移されました。明治五年（一八七二）から四年間は、元斎宮小学校の仮教場として使われてきました。



観音寺が記載されている絵図 延享2年（1745）

二十三 宇志葉神社（八王子）

大字斎宮牛葉組の産土神で、今の牛葉公民館の西北にある秋葉神社と庚申堂の北方にありました。

天正四年（一五七六）に斎宮寮の外院の跡地の南方を開墾し、新しく開通した伊勢街道に民家を建て連ねて西堀木郷が生まれたので、さつそくこの跡地をそのままに社殿だけを造り替え、産土神として奉斎したものです。

境内は明治元年（一八六八）に廃寺となつた觀音寺と社寺共有だったので、社殿は境域中の西方、即ち乾世古（坂本道）の傍らに押し移された形になつていました。



宇志葉神社の石灯籠
(現在は竹神社にある)

元は八王子と称したのを、明治二年（一八六九）に字名に因んで宇志葉神社と改称され、その後、明治四十四年（一九一二）に現在の竹神社に合祀されました。

二十四 三木亭（南勢旅館）

明治のはじめころ、大字斎宮牛葉の森下国松が、苗字の「森」の字を割つて「三木亭」と名付けた旅館を開業し、一時はかなりの客を取つて賑わっていました。国松の死後、長男はにい一が父の後を継いで、「南勢旅館」と改め、参宮客を相手に中々繁盛していましたが、国鉄や近鉄が開通し、徒步で伊勢神宮に向かう参宮客が減少したため、宿泊客が寂れ、遂に昭和九年の夏に廃業となりました。

廃業の翌年には森下家は四日市に移住したため、現在では当時の建物はありませんが、屋敷地の南奥に、国松の妹である森下きくが開いた、分家の森下家があります。

二十五 宗安寺

当寺は、伊勢市宇治中之町にあり、正保四年（一六四七）、増上寺二十一世弁蓮社業誉上人還無空脱大和尚が開創されました。宝暦の頃（一七五五年頃）紅蓮社謙誉法幢上人隋阿泰善大和尚中興となり、当時の基礎を固めました。

明治元年（一八六八）、中川進誉の時廃寺となり、のち知恩院説

教所となりましたが、明治二十一年（一八八八）、本多進海の時、伊勢市中之町から中町の称名寺（現在の宗安寺）の跡地へ復活させました。

明治四十三年（一九一〇）榮譽隆定の時、庫裡が建てられ、大正九年（一九二〇）に本堂の大修理が行われました。そして平成二年に本堂等が新しく建て替えられて今に至っています。



宗安寺（平成2年以前）

二十六 斎宮尋常小学校

明治五年（一八七二）学制頒布と共に、当時の戸長であつた永島源作の主唱により、斎宮字牛葉の観音寺の建物を校舎として、「斎宮學校」が開設されました。

明治八年（一八七五）に校舎は斎宮字中西の称名寺（今の宗安寺）に移された後、明治十五年（一八八二）に中西の中央北裏の蓮光寺の焼跡に二階建の新校舎が建てられここに移りました。この建築に要した用材は、野々宮（今の竹神社）境内の老杉を払い下げて充てられたものです。

この時、明星村全村からの児童教育の委託を受けましたが、明治二十五年（一八九二）に明星村にも小学校が置かれたことに伴い、委託教授は廃止されました。その後明治四十一年（一九〇八）四月、斎宮・花園両校を合併して「斎宮尋常小学校」を設立することとなり、校舎を斎宮・竹川両区の境である現位置に新築し、翌年七月、これに移転しました。

その後、学校の名称は、斎宮国民学校（昭和十六年）、斎宮村斎宮小学校（昭和二十二年）、斎明村立斎宮小学校（昭和三十年）、明和町立斎宮小学校（昭和三十三年）と変遷し現在に至っています。



斎宮尋常小学校（大正5年）

二十七 斎宮の関所

中世の斎宮地内の街道のようすを知る資料として、伊勢參宮の旅人が書いた參詣日記や、当時、南勢地域を支配していた北畠氏が指示した行政文書（判物・奉行人奉書など）があります。



斎宮の関所推定地

斎宮の閑が初めて文献にあらわれるのは、長禄二年（一四五八）で、伊勢内宮の神主荒木田氏の氏寺である田宮寺（玉城町宮古）の造営資金調達を名目として、伊勢国司北畠教具の被官丹生寺西実宗が代官を入れています。また寛政五年（一七九三）には、柳原殿という人物が、神宮造営のため斎宮に二ヶ所の閑を設け、一人当たり閑銭として十二文を徴収していました（祭主大中臣清忠宛て内宮一
補宜荒木田經書状）。この二ヶ所の閑所のうち一つは、參宮道から分岐して
田丸方面へ向かう現竹神社前の交差点付近が有力視されています。このほか、十五世紀末頃の「金剛之坂閑」（古和文書）は、金剛坂の坂垣内地区に比定されており、近世に街道が再整備される以前に、古代からの伊勢古道に加えて、新しく祓川を渡河して竹川、斎宮に至る道が機能していたことを窺わせます。このように斎宮廃絶後、斎宮を通過する主要道には、經濟の要として閑が設けられていました。

二十八 野々宮

かつて竹神社の社域は野々宮と称し、弘治元年（一五五五）、斎宮の住人野呂三郎（野宮とも書く）が、ここに城砦を築き、南勢の溢者数百人と共に立て籠もつて徳政の乱を起こし、鎮守の森のなかに祠もあつたという伝承があります。

元々、当該地は平安時代を通じて斎王の御殿や重要な役所があつた場所で、斎宮寮が廃絶後は神々しい森となつていきました。斎宮跡の発掘調査によれば、当該地区は、十世紀後半から十一世紀にかけて低い土壘に囲まれた中・小区画に分割されていた様子を窺い知ることができますが、こうした名残が中世の城砦跡と混同され、先の伝承が残されてきたのかもしれません。

野々宮（現、竹神社）



さて明治四十年（一九〇七）代になつて維持困難な神社の整理・合祀が進められたことを契機として、野々宮には、明治四十二年（一九〇九）、大字斎宮地内の八社が合祀され、『竹神社』も合祀し、各社の石鳥居や石灯籠等が集められ、新たに『郷社竹神社』として整備され、現在に至ります。

二十九 斎王の森

元弘三年（一三三三）十二月、後醍醐天皇の娘、祥子内親王が斎王にト定されたのを最後に、約六六〇年間存続した斎王制度は終焉を迎え、斎王の御殿や斎宮寮と呼ばれた役所群は荒廃の一途をたどり、その跡地は広大な山林荒野となりました。

その後、江戸時代にはある程度畠地としての開墾が進んでいたようですが、伊勢参宮案内書である『伊勢参宮名所図会』や江戸幕府の道中奉行が編集した『五街道分間延絵図』の『伊勢路見取絵図』には、斎宮の象徴として「斎王の森」が描かれているところから、かつての斎宮の存在が人々の記憶の中に生き続けていたことを物語っています。

江戸時代末期から明治にかけての国学者、御巫清直は斎王の森を基準に斎宮の復元案を作ったことから、斎宮の中心地は長らく斎王の森周辺と考えられてきましたが、発掘調査の進展に従い、この森は、方格地割と名付けられた碁盤目状の区画の北西隅に隣接する位置にあることが分つてきました。北西は乾の方角にあたり、古代の人々は悪い風の来る方向と考えていました。この森は、斎宮を惡靈から守る神がいる所だったかもしれません。

現在、斎王の森の中には、元神宮祭主北白川房子氏揮毫による「斎王宮邸」の碑や、昭和四年に三

重県が建てた「史蹟齋王宮跡」の碑があり、周辺は発掘調査で確認された掘立柱建物、井戸、区画溝、道路跡等が整備され公園となっています。

なお、旧参宮街道から斎王の森に至る三叉路には、明治三十六年（一九〇三）に組織された「齋宮舊蹟表彰会」により建てられたと思われる「齋王宮之遺蹟北三丁」と書かれた石碑がありましたが、

現在はやや東の牛葉公民館の入口に移設されています。



斎王の森（昭和初期）



「齋王宮之遺蹟」碑

三十 絵馬殿

かつて北野天神に通じる世古の西角に、荒祭宮の黒木の鳥居と並んで『絵馬殿』と称する小祠がありました。大きさは九尺四面（約二・七メートル四方）、高さ一丈一尺で、中に小さな神殿を設け、絵馬が奉掲されていました。



絵馬

『伊勢参宮名所図会』には、「斎宮の森に小舎あり、十二月三十一日夜、絵馬をかくる例なり。謡曲の絵馬」という是此事を作れる。昔斎宮に十二月晦日大祓ありて絵馬奉りしを、斎宮の儀廃れて後、絵にかける馬を奉りし事の例に成れるにやあらん。又世に絵馬という名は是を初めとするか。』と説明されています。謡曲の『絵馬』は、毎年節分の夜、天照大神が出現し、絵馬を絵馬殿に掲げ、その毛色によって明年の晴雨豊凶を相するという内容ですが、いっしが当地においても十二月晦日の真夜中に新しく掛け替えられる絵馬の図葉によつて翌年の豊凶を占うことができるという噂が広まり、元旦にかけて多くの人で賑わいました。

現在絵馬殿はありませんが、絵馬は竹神社の神宝として保管されています。

三十一 北野家

北野家は、元紀州藩の藩士増田伊右衛門から出ています。

安政三年（一八五六）、伊右衛門の三男信幸が斎宮村に移住し、北野の天神さんに奉仕して、「北野」の姓を名乗つて土着しました。信幸は、明治五年（一八七二）、神社制度が革新されると、直ちに、竹川村郷社竹神社、小倉社、八幡社、宇志葉神社、楠森社、丑寅社、柄本社、平尾村広橋社、上野村仲神社のまつりごとを担当する祠掌しょくじょうを命ぜられ、更に明治十二年（一八七九）には、大淀、坂本、中海、馬之上、佐田、行部、根倉、八木戸、浜田、有爾中、蓑村の各村神社の祠掌をも兼ねていましたが、明治四十年（一九〇七）に病死しました。その後、信彦・信敏・信章と三代続けて竹神社の官司をされていました。

三十二 六地蔵石幢



六地蔵石幢

高さ一九四・五センチメートルの砂岩製の石幢です。^{セキとう}笠の一部を欠損している以外は、宝珠、龕部、^{えんじょ}中台、竿、基礎は完存しています。竿に「永正癸酉（一五一三年）卯月日」の銘があり、ゆつたりとした笠の形、こじんまりとした龕部の六地蔵尊、中台の時代の特徴をよく示す格狭間や蓮弁、すなおな竿石の姿、張りのある基礎の反り花など、室町時代後期の特色をよく示しています。

斎宮は神領だったため明治の神仏分離令により、ほとんどの寺院が廃せられ、笛川の中町地蔵院も廃寺となり、石幢のみが残ったものだと考えられています。

県内では、この時期の六地蔵石幢としては貴重であり、昭和六十二年三月二十七日に、三重県指定有形文化財（工芸品）に指定されています。

三十三 下郷（現在の勝見地区）の庄屋、須賀家・加藤家

寛永九年（一六三二）に熊本城主、加藤忠弘が領土を没収された際に、その家臣、加藤弥五右衛門が松坂に落ち延び、同伴してきた須賀李之助が、李右衛門と改称して須賀家を興し、江戸時代、代々下郷の庄屋をしていました。

また、加藤家は、同じく同伴してきた須賀右馬之助（李右衛門の弟）が興した家系で、同家も下郷の庄屋をしていました。

加藤家は代々清左衛門を名乗っていましたが、晩年、福寿院の僧侶となり、同院を経営していましたが、明治二十二年（一八八九）、同院が廃寺となつて以降は農業を営んでいました。

三十四 明星茶屋



明星茶屋 『伊勢参宮名所図会』より

明星茶屋は、伊勢街道の松阪と伊勢の中間に位置する集団茶屋として街道の名物となり、そこの茶湯を喫すると内外清浄になるという言い伝えがあり、参宮する旅人は、安養寺に立ち寄って茶湯を喫し、門前は大いに賑わいました。また、伊勢へ向かう伊勢街道最後の茶屋として、参宮者はここで旅の垢を落とし、旅装を整えて伊勢神宮に向かいました。

街道筋で明治まで残っていた旅館としては、三田屋・小島屋・板屋・林家などがありました。

このうち三田屋は、明星茶屋の繁盛を支えてきた茶屋の一つで、伊能忠敬日記には、櫛田川、祓川を測量に来て三田屋に止宿と記されています。

三十五 安養寺

安養寺は、京都五山の一つ、臨濟宗東福寺に属する寺で、伊勢国出身で東福寺第九世だった寂兀^{むこうだいえ}大惠^{だいえ}が鎌倉時代の永仁五年（一二九七）、上野宇寺屋敷（現在の済生会明和病院）の地に開山しました。

室町時代には、幕府や伊勢国司の北畠氏から手厚い保護を受けていましたが、天正四年（一五六六）、北畠具教が三瀬御所で織田方の攻撃によって死んだ後は、当寺も荒廃し衰退したものと思われます。その後、天正十六年（一五六八）、蒲生氏郷による伊勢街道の付け替えの影響をうけ、一六三〇年代に現在地に再興されました。

明治元年（一八六八）の廢仏毀釈^{はいぶつぎしゃく}により、一時、廢寺の運命となりましたが、明治十二年（一八七九）に本堂の再興が図られ、平成十七年十月、老朽化に伴う再建が図られています。

なお、創建時の安養寺跡は、明和町が七回にわたる発掘調査を行い、外周の大堀などを確認し、「百間四方（約一八〇m）の境内に堀を巡らせた大伽藍」であったという伝承が裏付けられています。



安養寺

三十六 明星水

安養寺の茶湯を喫すると、たとえ不淨垢惡の者でもたちまち内外清浄になるという言い伝えがあり、旅人の接待に使った安養寺の井戸は明星水と呼ばれ、明けの明星、宵の明星が降臨すると伝えられ、日本三靈水の一つの名水で、旅人の立ち寄る姿が絶えなかつたと言われています。

安養寺開山の祖、仏通禪師は、伊勢神宮両宮の参拝を欠かしたことのない崇敬家で、ある日いつものように参詣に出かけると道端で若い女が年老いた母親の亡骸にすがつて泣いていた。哀れに思つた仏通はその亡骸を背に負つて墓地まで運び懇ろに供養してやりました。女はたいそう喜んだが仏通は死骸に触れてしまったのでその日は参拝を遠慮しようと考へ、足が進まなくなりましたが、近くの川で身を清め、改めて両宮を参拝しました。

外宮から下向して来ると、ある坂道で一人の老人が現れて「自分はこの辺の神である女に化けてお前の信仰心を試した。その赤心奇特に思う。清浄火徳を授けよう」と告げて消え去りました。以来、安養寺の火を使つた湯茶には清めの力があると言われるようになりました。



安養寺の井戸（明星水）

三十七 仲神社



仲神社

仲神社は、『伊勢式内神社社檢録』によれば、「上野村南西二丁ヲ去レル松林ノ中ニ古宮ト稱スル處アリ、東西十間ニ南北廿間許無高ノ地ナリトゾ。其處ニ在ケル社ヲ東三丁許去ル地へ移セリト言ウ。」とあり、元は現在地より南西約二百メートルの位置にありました。旧村社は、明治四十一年（一九〇八）六月二十一日、櫻神社に合祀されましたが、昭和二十年に再び現在地に分祀されました。本殿は神明造。祭神は神八井耳命かみやいみのみことです。

三十八 そうめん坂

伊勢街道沿いの明星（下有爾）集落のはずれに、「そうめん坂」の標柱があります。

この地は、井原西鶴の著書『西鶴織留』に「明野ヶ原の明星茶屋こそおかしけれ、いつとて振袖の女赤根染の裏の付きたる縫着物を、黒茶にちらし形付けぬはひとりなし、日本にここ女のほど白粉を付ける所又となし」とあるように、有名な明星茶屋のあつた地域です。

そうめん坂は、明星茶屋の一部に位置し、そうめんやうどんを出す店が何軒も建ち並んでいたことから、称されていた坂の名であることが、今に伝え継がれています。



そうめん坂

三十九 転輪寺

加賀の能美郡生まれで叡山で修業した本教上人が六十歳の頃、この地を訪れ寺を建立し本教寺と号しましたが、元禄十五年（一七〇二）に転輪寺と改められました。これは、御婆さんと言われていた本尊こそが仏教の十王經で説くところの、冥府で亡者を裁くという転輪王ではなかろうかとのことから、古くからここに転輪王が祀られ信仰されていたので、その名称をとつて本教寺を転輪寺と改めたものと考えられます。

八月の盆には、転輪寺住職によつて供養されることになつております。また以前には、お堂の前で盆踊りが盛大に催されていました。

なお、本堂以外の転輪寺の諸施設として、三門（表門）、庫裡、鐘樓・梵鐘、經堂、南門などがあり、三門、庫裡、鐘樓・梵鐘は明和町有形文化財に指定されています。

三門は、「二門一戸薬医門。本瓦葺起り屋根。もと度会郡玉城町田丸城内の門と伝え、親柱の見付には飾り金具を打ち、造りもしつかりしている。」と『明和町史』に記されています。規模は一・四坪（四・九平方メートル）で、屋根の形が変わっていて城内不淨門（死刑者などを運び出す門）の特徴だとう人もいます。遺骨を運び出す門が、今では運び入れる門になつていると先代住職はよく笑つています。

した。

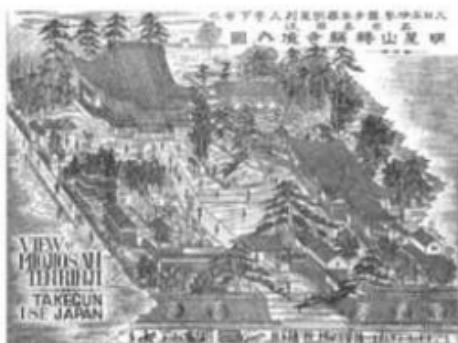
伊勢湾台風の時に一度、仰向きにひっくり返ったことがありました。今は復旧しています。

庫裡は、元の本堂で、江戸時代の創建。内陣の欄間に鳳凰の透し彫りを入れて飾り、その下の両開き戸には細かい堅棟を入れ、その腰に花鳥の透か彫りを嵌めています。

鐘楼は、延宝八年（一六八〇）に建立。径一メートルの梵鐘は、なんとか戦時の供出を免れたため残つたものです。



転輪寺三門（表門）



『明星山轉輪寺境内圖』

経堂の本尊は、銅造釈迦如来坐像
(像高六十センチ、台座三十センチ)、
南門は松坂城から移したと伝えられ
ていますが、建立年代は不明です。

四十 オンバサン

明星のオンバサンは、津波で流れ着いたと伝えられています。

転輪寺の東南二百メートルほどの瓦葺のお堂の中に、オンバサンと呼ばれている石像が祀られています。境内には庚申像、役行者の石像を祀る小祠も建っています。

地元では、いつのころか、津波によつて赤坂に流れ着いたのであるが、村の人に十王のところへ行きたいと告げたので、現在のところに祀つたのだと伝えられています。



オンバサン

四十一 史跡水池土器製作遺跡

そうめん坂の標柱から明星集落に入り、二百メートル程行き、右折道路先に、史跡水池土器製作遺跡があります。

昭和五十二年度に発掘調査が行われ、調査報告書によると、「出土遺構は、土器焼成壙十六ヶ所、掘立柱建物四棟、竪穴住居跡三棟、粘土溜二ヶ所、溝一条などであつた。このうち、特記すべきものは、長さ二・六・四・二メートル、竿大幅一・二・一・八メートルと大小あるが、いずれも二等辺三角形の平面を持つ土師器の焼成壙である」と記されています。

こうした土師器生産に関わる遺構が一括で確認された遺跡は、貴重かつ全国で初めてであったので、昭和五十二年七月二十五日、約九、〇〇〇平方メートルが国史跡に指定されました。

なお、これ以降、近隣の遺跡では、同様の土師器焼成壙が多数発見され、伊勢神宮や斎宮を背景として、有爾郷が土師器の一大生産地であつたことが判明しました。



史跡水池土器製作遺跡

四十二 街道沿いの営み（下有爾界限）

大正から昭和にかけて下有爾界限では、街道付近の農民の大切な生活の糧として、菅笠・菅笠骨の生産が盛んに行われていました。明星の蘇生の湿地には菅が栽培され、住宅地の近くには竹林も多く、菅笠の骨を造り、菅笠を縫つて製造・販売していました。



下有爾界限の街道筋の街並み（山城屋近辺）

また、明星会館前で酒店を営んでいた鈴木商店は、味噌、醤油を扱う商売をしていましたが、先代は疊屋を営んでいました。戦時中までは、住居は疊屋の造りになっていましたが、その後、改修されて酒店の造りとなりました。疊屋の時代には、家で直すからと、針と糸をわけてもらいに行く人があったといいます。

四十三 新茶屋の沿革

新茶屋付近は、古代には明野が原に接続した荒涼たる原野であったが、天正十六年（一五八八）、蒲生氏郷が松ヶ島より松坂に移り、城下町を形成してから伊勢街道を改修しました。そして街道が完成すると近郊より人々が集まり、家屋が立ち並び茶屋を始める一方、原野を耕鋤して生活するようになり新茶屋の地名が起つたといわれています。

紀州藩に仕えた森田六太夫氏昌が、男三人女一人を連れてこの街道筋を開拓したので、追々この地に移り住む者が出て、宝曆年間（一七五〇～一七六三）には、百五十余りの戸数があつたといわれています。それらは旅籠や茶屋を営む者が多く、明星茶屋に対し新茶屋として呼ばれるようになります。

森田家はその後、旅籠「秋田屋」を開業しました。新茶屋にはその他、泉谷、七見屋、熊野屋、柳屋、などの旅籠がありました。

飲食店には、松屋、中野屋、つぼ屋、小柳、米穀雜貨商、上村屋、徳田屋があり、その他、かじ屋、履物屋が立ち並び、遊技場として大弓吹き矢を使つて遊ぶところもありました。

煙草入れ製造では、三忠を初め、瀬古屋、成見屋、永楽屋がありました。



新茶屋の街道町並み



道標(従是外宮二里)

当時は、「松阪より三里」「古市より三里」という街道最後の集団茶屋で、春の参宮客の来る季節になると街道筋は押すな押すなのにぎわいを見せて、旅人による錢儲けにて百姓をする人がなかつたようです。誰言うとなしに、「新茶屋長い町・振袖町」と呼ばれ、それだけのんびりした日常生活をしていたようです。

四十四 秋田屋事件

秋田屋は、たまたま起つた秋田屋事件というものをもとにして、芝居に上演されたほどの名門であります。それはありふれた痴情事件でありましたが、当時の明星茶屋の盛況振り、秋田屋の繁昌から押して、大変な騒ぎであつたろうと想像します。

事の顛末は次のとおりです。松坂の干魚問屋の手代九右衛門は、かねてから秋田屋のよしと相愛の仲でしたが、それを快く思わぬ兄手代十右衛門もまたよしに執心でした。そこで十右衛門は一つの悪計をめぐらし、九右衛門に窃盗の罪を着せて店を追い出し、よしに近づいて結婚を承諾させました。一方九右衛門は店を追い出された後、いつたん桑名の叔父の家を頼りましたが、ここでも相手にされず、思案に暮れて伊勢に辿りつき、もう一度よしに会いたいと思いました。ところが丁度その晩が、よしと十右衛門の祝言の日に当たっていました。よしのお歎黒姿を垣間見た九右衛門は、もう半狂乱となり、前後も弁えず飛び込んでよしを刺し、十右衛門を切つてしましました。



秋田屋（昭和 34 年頃）

四十五 三忠の擬革紙



三忠店頭図（明治時代）



煙草入れ



パリ博覧会金牌賞状

革の風合いを紙で表現した擬革紙は、みしま屋忠次郎（堀木忠次郎）が、貞享元年（一六八四）、カツバ紙を加工して考案したと伝えられています。屋号を三忠と称し、当時流行っていた煙草入れを擬革紙で製作して売り出したところ、たちまち参宮客の土産等で大流行し、その後、多気、度会、その他の全国でも作られるようになりました。明治になると擬革紙はヨーロッパ・アメリカの博覧会で絶賛され、大量に輸出されて壁紙などにも使われました。

四十六 田丸城の門

新茶屋集落の中央を通る伊勢街道から南に折れると新茶屋会館があり、その前の小道を西に百メートルほどの右手に標柱があります。

この城門は明治の初め、この地の堀木家が、いくつかあつた田丸城の城門の一つを譲り受けたと伝えられているものです。

全国的な城の取り崩しは、明治十年（一八七七）の西南の役の後に、士族の反乱に苦慮した政府が、城の存在に脅威を感じ、打ち出した政策によるものとされています。しかし、田丸城の取り崩しは、明治四年（一八七一）に行われています。

この事情については、「明治元年、佐幕派と目され苦境にあつた紀州藩は、田丸城主で藩の家老でもあつた久野氏が陽に勤皇を唱え、陰に佐幕の策動をしたと流言し、明治二年に城を取り上げ、華族の道を断つなど行つた。このような田丸城の犠牲の上に、紀州藩は難局をしのいだ。」とあります。

また、「城の明け渡しに際し、田丸城士達は、身命を賭して政府に直訴するなどしたが叶わず、自刃に及ぶ者もあつた。そして、明治四年に城は取り払われた。」とあります。

今、堀木家の竹林の入り口門として、ひつそりと佇むこの城門は、南勢随一の名城とうたわれた田

丸城の栄光とその悲痛な最期を静かに語りかけてきます。



田丸城の門(遠景)



田丸城の門

四十七 八柱神社



八柱神社

江戸時代初期、慶安元年（一六四八）新茶屋の集落ができたころ、そこに牛頭御厨社を建て産土神としたという。その後、宝暦二年（一七五二）に京都の吉田神社から八王子社の社号を受け、慶応三年（一八六七）、社殿を造営しました。八王子社の場所は新茶屋牛場地内現在の寺蔵敷周辺と思われます。

明治二年（一八六九）の神社改めで、社号を八柱神社と改め、明治二十年（一八八七）には社殿の造営遷宮が執り行われました。その後、明治二十一年に神社合祀令により、祭神は有爾桜神社に奉還することになり、堀木忠太郎宅（三忠）の稻荷神社境内に一時遙拝所が設けられました。

昭和二十年末に八柱神社は新茶屋の旧地へ分祀奉還され、昭和三十一年社殿を建立するに当たり、現在地（新茶屋丸岡）に社地を整えて鎮座して社殿は本殿から鳥居までの一式が整えられました。

四十八 新茶屋の弘法さん

名古屋プロパンの横にある弘法さんは、道行く人々の無病息災を見守っているかの様に南向きに赤い頭巾をかぶり、前垂れを掛けて静かに鎮座されています。

伊勢街道が開拓された時代に祀られたと思われます。当時、この街道は参宮客で押すな押すな人の波にて菅笠が触れ合うほどにぎわっていました。旅人達は弘法さんに道中の無事と諸々の願い事を祈つたことでしょう。

大正八年（一九一九）秋ごろ、何かの出来事で付近周辺の人々が僧侶に祈祷をしてもらい、弘法さんを土中に埋めたのが事の起こりで、関係した人々が次々と急死しました。中には弘法さんの正座姿で死んだ人もいたので、弘法さんの崇りとして当時新聞紙上に報道され、世間の人々を驚かせました。それがため、再び掘り出して現在地に祀られるようになりました。今も新しい花や線香が絶えまなく供えられて います。



新茶屋の弘法さん

史跡斎宮跡・伊勢街道まちづくり会名簿

永島 酒

田所利郎

事務局

北村純一

明和町斎宮跡・文化観光課

辻 孝雄

下村和生

中野 敦夫

倉田直純

乾 茂子

乾 哲也

須賀恒彦

西岡久美子

中野 敦夫

三田正之

木村淑子

乾 哲也

生田千秋

桜井可美

中野 敦夫

渡邊幸宏

中野 敦夫

小林正剛

中野 敦夫

辻 美穂

中野 敦夫

大川 浩

中野 敦夫

北岡六夫

中野 敦夫

乾 健郎

中野 敦夫

中西修一

中野 敦夫

森島啓之

中野 敦夫

(順不同、平成二十七年三月現在)

(オブザーバー)

福田由佳（松阪地域防災総合事務所）

濱口恵理子（三重県農土整備部景観まちづくり課）

榎村寛之（斎宮歴史博物館）

大川勝宏（斎宮歴史博物館）

伊勢街道ものがたり

(明和町竹川～新茶屋)

平成 27 年 7 月 31 日

編集 史跡斎宮跡・伊勢街道
まちづくり会

発行 明和町

印刷 光出版印刷株式会社